

時制言明と四次元主義 ——段階説の存在論的前提について——

西條 玲奈

およそ形而上学的理論とは世界にはどのような事物がどのように存在しているかを語り、意味論的理論はそれらに基づき言語を解釈するものである。このとき意味論的理論を考察するなら、それが前提する形而上学的理論に足を踏み入れることになろう。ここではその事例として、持続についての形而上学的理論である四次元主義とその意味論的理論の一つとして扱われる段階説を取りあげる。段階説の内実を考察すると、そこには当初想定されていた四次元主義の主張よりも多くの存在論的前提が置かれていると分かる。これを明らかにすることが本稿の目的である。

1 四次元主義の主張

1.1 無制限構成を認める四次元主義

現代の形而上学の領野において四次元主義は持続についての理論の一つである。ここで念頭においている四次元主義は、おそらくもっともよく言及されるセオドア・サイダーの定式化したものである(cf. Sider (2001))。彼の採用する四次元主義の存在論的主張は次の二点からなる。

時間的部分のテーゼ。 持続する事物は時間的部分をもつ。直観的な理解を得るために例をあげるなら、紀元前399年の時点 t において毒杯をあおいでいるソクラテスは、ソクラテスの生涯の時間的部分である。より厳密に述べればこう定義される。 x が y の瞬間的な時間的部分であるのは、(i) x は y の部分であり、(ii) x は t に、そして t にのみ存在し、かつ(iii) x は t に存在する y の全ての部分と重なり合っているときかつそのときに限る¹。ただし x は必ずしも y の真部分である必要はない。 x と y が同一であってもかまわない。四次元主義を引き受けるとは時間的部分を認めることと等しい。

無制限構成²のテーゼ。任意の時空領域は対象を構成する。つまり、任意の時点³ t_1, t_2, \dots, t_n における対象からなるどのクラスもそのクラスの成員全てを部分とする融合体を構成する。このとき融合体は時空的に連続していなくてもかまわない。たとえば紀元前 399 年のソクラテスの鼻と 2008 年のパルカン半島からなるクラスは融合体を構成する。

先述した通り四次元主義の基準は時間的部分を認めるかどうかにある。したがって無制限構成は必ずしも採用されなくてもよい⁴。しかし無制限構成を採用することは四次元主義にとって有用な選択肢であるに違いない。これについては 1.3 節で述べることにして、以下ではこの二つのテーゼを是認する立場を四次元主義⁵と呼ぶことにしたい。

1.2 時間的部分

しかし四次元主義がどのようにして事物の持続を説明することができるのか、一瞥しただけでは分かりづらい。たとえば時点 t_1 においてソクラテスは色が白く、時点 t_2 においては色が黒いでしょう。このとき無制限構成により、少なくとも t_1 におけるソクラテスと t_2 におけるソクラテスから構成される四次元個体あるいは時空ワームが存在している。このソクラテス時空ワームは t_1 における白い時間的部分と t_2 における黒い時間的部分をもつ。言い換えれば、この場合ソクラテスが持続するといえるのは異なる時点に異なる時間的部分をもつからである。このとき持続の主体はこのソクラテス時空ワームであって、各時点におけるソクラテスではない。また t_1 のソクラテスと t_2 のソクラテスは同じ時空ワームに時間的部分として帰属するが、両者は異なる時間的部分である。言ってみれば任意の時点 t における a と時点 t' における a' を時間的部分とする時空ワーム A が存在し、かつ $a \neq a'$ であるといえる。だから四次元主義ではさまざまな性質を獲得しては喪失するような変化の主体は存在しない。変化は時間的部分の配置である。

以上より時間的部分による持続の説明は次の二点に要約できるだろう。第一に、事物が持続するのは異なる時点に異なる時間的部分をもつことによる⁶。第二に、時空的対象 a の t における時間的部分とは t における対象 a の全体のことである。

1.3 無制限構成

時間的部分が変化を通じた持続の原理になるとしたら、無制限構成は持続する事物そのものである時空ワームを構成する原理である。つまり無制限構成はどのような対象であれば持続の主体である時空ワームとして認められるかという問題にトリヴィアルな回答を与えるものである。何かが時空ワームであるためには、時間的部分同士の時空的連続性や内在的因果性といったようないかなる制約もない。任意の時空領域が時空ワームを構成するからである。

とはいえ、たとえばソクラテスの時空ワームとしてもっとも自然な対象⁷は、彼が生まれてから死ぬまで時空的に延長する連続体だと考えられるかもしれない。だがこのようにある事物が存在し始める境目、また存在しなくなる境目がどこにあるかが比較的明瞭な場合ばかりではない。事物がいつ存在しなくなるかが曖昧な場合もある。たとえば n 個の金属片からなるノーチラス号の部分を、 t_1 において一つ、 t_2 においてもう一つというように時点毎に一つずつ除去していくとしよう。一つの金属片を取り去っただけでこの船がノーチラス号でなくなるとは言い難い。だが $n/2$ 個の金属片を取り去った場合はどうか。 $n-m$ 番目の金属片を取り除いた時点 t_m までノーチラス号は同一である、こう言えるような m の値は一意に定まらない。無制限構成を採用する限り、 m が任意の値を取る場合 $n-m$ 個の金属片は一つの時空ワームを構成することになる。だからどの時点が存在し始める境目であってもよいし、どの時点が存在しなくなる境目であってもかまわない。だからいつ事物が存在し始めいつ存在しなくなるのか、という問いは無制限構成のもとではトリヴィアルに解消されるのである。

さらに、無制限構成の放縦さはおよそ自然であるとは言い難い対象に言及する場合も有用である。たとえばブルー色の鉱石 α というものを対象として認めることができる⁸。緑や青といった自然な色とは異なり、事物がブルー色であるためには時点に言及する必要がある。たとえば、時間間隔 T を通じて存在する鉱石 α がブルー色であるには、鉱石 α は時点 t より前は緑色の鉱石 g である複数の時間部分から成りしかも時点 t 以後は青い鉱石 b の時間的部分から成るような時空ワームでなければならない。常識的な立場ではブルー色の鉱石 α 時空ワームの存在を確保する積極的な理由は見出し難いだろう。しかしこのブルー色の時空ワームは、たとえば帰納法の妥当性を論じる哲学者の間では興味

深いものとして取り扱われるかもしれない。総じて無制限構成のもとでは、自然な対象とそうではない対象に区別をつけることはないといえる。ソクラテスの生涯からなる時空ワームもブルー色の鉱石を構成する時空ワームも存在論的に身分を等しくするのである。

2 時間的言明の意味論としての段階説

四次元主義の主張内容を確認するのが目的であるから各論点にこれ以上深入りする必要はないだろう。こうした四次元主義に適合する意味論的理論は複数ありうる。そのうちここで検討するのは四次元主義を定式化したサイダーが提唱した段階説⁹である。もっとも、最終的には段階説という意味論的理論を採用することにどのような存在論的前提があるかを検討するのが本稿の目的である。この目的に到達するため、まずは段階説が時間的意味論としてはどのような理論であるかを明らかにしたい。

段階説の具体的な内容に立ち入る前にもう一言添えるなら、確かに段階説を論じる人々のあいだではこれが意味論的理論であることがしばしば明示的に述べられる¹⁰。しかし他方で段階説の意味論的な主張と、そこに前提される存在論的な主張が明示的に区別されることなく論じられる場合があるのもまた事実である¹¹。持続の問題を扱う際の存在論的な主張と意味論的な主張のレベルの違いを明確にすることはここでのもう一つの目的である。

2.1 段階説

段階説は大きく次の三つの主張からなる¹²。一つは名辞がどのような対象を指示するかという問題に関わり、いま一つは時間的な言明の真理条件に関わる。そして最後は真理条件において重要な役割を果たす対応者関係に関するものである。

(i) **指示の段階説**。名辞“*n*”が指示するのは発話の時点 *t* における *n* の瞬間的な時間的部分である。ここでは瞬間的な時間的部分のことを段階と呼ぶ。たとえば時点 *t* における発話「うさぎ *the rabbit* が走っている」の「うさぎ」が指示するのは *t* における瞬間的な段階であって、時空的に延長するうさぎの時空

フォームでもなければ、時点 t におけるうさぎの不分離な *undetached* 諸部分¹³ でもない。名辞が発話の時点における瞬間的な段階を指示するのであるから、たとえばこの「うさぎ」という単一の名前は発話の時点に応じて異なる指示対象をもつということになる。

(ii) 時間的対応者理論。段階説の第二の特徴は、時間的な言明の真理条件を与えるのに時間的対応者関係を用いる点である。過去時制言明の場合その真理条件は次のように与えられる。

(*)「A は P だった」A was P が t において真であるのは、P であるような t より前の時点 t' においてある段階 $s_{t'}$ が存在し、かつ t における A 段階 s_t が $s_{t'}$ の対応者であるときかつそのときにかぎる¹⁴。

たとえば「うさぎは走っていた」が真になるのは、発話より前の時点において走っているよううさぎ段階が存在し、かつそれが発話の時点のうさぎ段階の対応者だからである。

この時間的対応者理論とは、デイヴィッド・ルイスが様相概念を表現するために作製した対応者理論¹⁵の時間版である。様相對応者理論における個体の貫世界同一性は別の世界に当該の個体の対応者が存在することによって確保される。世界 W にいる個体 O と世界 W' にいる O の対応者 O' は、よく似てはいても数的に異なる存在者である。同様に、時間的対応者理論における個体の通時的同一性は、別の時点に当該の個体の対応者がいることによって確保されるのである。

(iii) 対応者関係の文脈依存性。もう一つ特徴的なのは段階の間に成立する時間的対応者関係が文脈に依存するという点である¹⁶。文脈依存性が明らかになる場合として、粘土と彫像の一致のパズルを考えてみたい。数百年前から存在している粘土の塊を「粘土」、それを材料として3年前に作られたラオコーンの彫像を「ラオコーン」と呼ぶことにしよう。このときラオコーンと粘土は異なる性質をもつ別の対象であるにもかかわらず同一の時空領域を占めることになる。ラオコーンは粘土が一時的にもつ形状であるというより、まさしく3年前から存在し始めた別の対象である。粘土とラオコーンは存続している期間が異

なるという、別の時間的性質をもった別の対象である。たとえばこの彫像の作り手はラオコーンが潰されてしまったことを嘆くかもしれないが、そのとき粘土が存在し続けていることに何の慰めも見出せないだろう。粘土は存在してもラオコーンは存在しないからである。

このとき段階説は一つのジレンマに陥る。現在のラオコーン／粘土段階 s は、ラオコーンが完成する前の粘土段階 s' の対応者だろうか。もし対応者なら、「ラオコーンは作られる前から存在する」は真になってしまう。他方でもし対応者でなければ「粘土は数百年前から存在している」が偽となる。段階 s はラオコーンが完成する前の段階と対応者関係にないからである。

これに対して対応者関係が文脈依存的であるなら、この場合に彫像としての対応者関係と粘土としての対応者関係という、類に相対化された二つの時間的対応者関係を認めることになる。ここで類に相対化された対応者関係を含む形で未来時制言明の真理条件を以下のように書き換えることができよう。

(*)「A は P だろう」A will be P が t において真であるのは、P であるような t より後の時点 t' においてある段階 $s_{t'}$ が存在し、かつ t における A 段階 s_t が $s_{t'}$ の A 対応者であるときかつそのときにかぎる。

彫像としての対応者関係は段階 s とラオコーンの制作以前に存在する段階との間に成立しないけれども、粘土としての対応者関係は成立する。どちらの関係が積極的に採用されるかは文脈によるのである。

たとえば、仮にラオコーンが潰されてしまう運命にあるとする。この場合、現在の時点 t において次の二つの文の真理条件はそれぞれ以下のように与えられる。

(a)「ラオコーンは存在しなくなるだろう」が t において真である¹⁷のは、 t より後の任意の時点 t'' においてある段階 $s_{t''}$ が存在しないか、または t の段階 s_t が時点 t'' の段階 $s_{t''}$ と彫像対応者関係にないときかつそのときにかぎる。

(b)「粘土は存在するだろう」が t において真であるのは、 t より後の任意の時点 t'' においてある段階 $s_{t''}$ が存在し、かつ時点 t の段階 s_t が時点 t'' の段階 $s_{t''}$ と粘土対応者関係にあるときかつそのときにかぎる。

2.2 補足

前節で上げた段階説の三つの要件のみでは明らかに説明が不十分と思われる箇所がある。ここでは時間間隔の扱いについてのみ補足したい。

長期述語

前節に述べたような仕方では段階説は時制を扱うことはできそうだが。しかし段階説では、単一の時点において主語に述語があてはまるということは説明できても、幅のある時間間隔に対して述語があてはまる場合を扱うことができるかどうか、一見すると不鮮明である。たとえば「ホーマーは『オデュッセイア』を読みきった」という文を考えてみたい。この文を真にするには、ホーマーが『オデュッセイア』を発話の時点 t より前のある時点で読んでいるというだけでは不十分に思われるし、『オデュッセイア』を読み終わった瞬間があるというだけでも同じである。

しかし前節で言及した段階説の分析では、「ホーマーは t より前の時点 t^* で『オデュッセイア』を読みきった」の真理条件も「ホーマーは t より前の十二時間をかけて『オデュッセイア』を読みきった」の真理条件も同じものになってしまう。つまりどちらの場合も真理条件は、時点 t のホーマー段階が存在し、かつそれより前の時点において『オデュッセイア』を読んでいるようなホーマー段階と対応者関係にある、というものである。おそらく『オデュッセイア』を読みきる」といった例化するのに時間がかかる述語——これを長期述語と呼ぶことにする——を扱う際には補足が必要となるだろう。このとき長期述語の場合「ホーマー」は時間的に延長した時空ワームを指す、といった変更を加えるわけにはいかない。名辞が発話の時点の瞬間的な段階を指示することは段階説の条項の一つだからである。とすれば付け加えられるべきは、『オデュッセイア』を読みきる」という述語にあてはまる時間間隔 T の各時点に存在するホーマー段階の集合が、対応者関係の適切なネットワークで相互に結びついている

ということではないだろうか¹⁸。

3 対応者関係の内実¹⁹

以上で対応者関係は段階説による時間的言明の意味論で重要な役割を果たしていることが窺えたと思う。しかしこれまで対応者関係がどのようなものかを言及せずに済ませてきた。だがその内実を明らかにせねば段階説による持続の説明が何であるかほぼ何も語っていないに等しい。そこで、対応者関係の内実を発案者であるルイスに即して説明したい。

3.1 対応者関係は同値関係ではない

対応者関係がルイスの対応者理論に由来するものであることは先に述べた通りである。彼が規定する対応者関係は同値関係ではないことが明確に述べられている²⁰。ある関係が同値関係でなければ、それは推移性、対称性、反射性のすべてを持つとは限らない。様相対応者関係は反射的だが推移的でも対称的でもない。この点で同値関係である同一性関係とは異なる²¹。

時間的対応者関係は同値関係だろうか。推移性が成立しないような事例がたやすく考えられるのだから、そうではない。時間的対応者関係も同値関係ではないとすれば、当然のことながら同一性関係ではない。同一性関係は同値関係だからである。このことは、段階説が通時的同一性を数的な同一性とは別のものだと考える立場に与することを意味するだろう。そしてこれは段階説にとってただちに欠陥となるのではない。通時的同一性を数的な同一性としてとらえるかどうか、それ自体議論の余地があるからだ。ただし、これはあくまでルイスの路線に沿った場合であって、対応者関係を分析可能な概念とみなすか原始的なものとみなすかはオープンである。

3.2 対応者関係は世界とわれわれとによって規定される関係である

ルイスは対応者関係を類似性の関係によって分析する²²。このことは対応者関係が文脈依存的²³であることに関連する。対応者関係が文脈依存的であるとは、ある時点における事物は話し手の関心によって別の時点の事物の対応者で

あったり、そうでなかったりするということだ。とすれば一つ疑問が生じる。対応者関係とはわれわれの意図や慣習によって成立する恣意的な関係なのか、それとも関係項である事物がもつ様々な性質によって規定され、成立する関係なのだろうか。

対応者関係とはある面で会話の文脈やわれわれの関心に依拠している。どのような側面の類似性に着目されるかは場合によるとしかいえない。たとえばソクラテスとアルキピアデスが共に人間であり自然種の類似性が問題となる場面もあれば、ソクラテスと大理石が共に白いという色の類似性が強調される場面もあるだろう。けれども人間であるとか白さといった、そこに類似性が相対化されるところの類が何であるかは、事物がどのような性質をもつかに存している。ということは、aとbとが類Aにおいて類似しているといえるのは、aもbも類Aに属するからである。ならば、対応者関係とは事物と事物との間に成立している関係だといえよう。ただしそれは文脈に依存するという点で、「年長である」といったように純粹に関係項の性質のみから規定される²⁴ 関係とは異なる。またそれは事物の間に成立するという点で、契約関係のように完全にわれわれの意図や慣習に依存する関係でもない。したがって対応者関係は世界のありようとわれわれの双方によって規定される関係であると言えるだろう。

4 段階説の存在論的前提について

4.1 段階説からの存在論的な要請

それではこれまで検討してきた段階説の特徴をふまえ、これがコミットする存在論的な主張を明示化したい。

(i) 指示の段階説。これによれば名辞の指示対象は発話の時点における瞬間的な段階である。とすれば段階説を採用する以上、諸事物の瞬間的な時間切片から構成される宇宙を想定することになる。四次元主義による時間的部分のテーゼでは、便宜上瞬間的な時間的部分を取り上げた。しかし、どちらが好ましいかはともあれ、時間的部分は時間的な幅をもつものとして定義することもできる。また時空的に原子を欠いた均質の宇宙であるという想定とも両立可能である。指示の段階説を用いるなら宇宙は無数の段階からなる。

(ii) 時間的対応者理論。これは時間的な言明の真理条件を対応者関係によって与えるものであった。時点 t から事物 O が存在し続けているのは、現在の O 段階は時点 t の O 段階の対応者だからである。とすれば、このことから次の二つの主張が導かれる。一つは段階説では、事物が持続するということは、段階同士が対応者関係にあるということである(対応者関係による持続)。したがって、段階説において事物が持続するといふとき事物の数的な同一性は確保されない。対応者関係は同一性関係ではないからである。

また (i) 指示の段階説をとらなかつたとき、持続の主体は瞬間的な段階である。なぜなら時点 t から現在まで存在しているという時間的性質を担うのは現在の瞬間的な O 段階であつて、関連する対応者関係によって結びつけられた段階の集合ではないからだ(瞬間的な持続物)。また各時点に存在する段階は全て数的に異なる対象である。したがつて、段階説において事物の持続とは当該の事物が複数の時点に存在することではない。繰り返しになるが、ある時点に存在する段階が持続しているということは、別の時点の関連する別の段階と対応者関係にあるということなのである。

4.2 段階説の存在論的前提

前節で明らかになつた主張をふまえると、四次元主義と段階説が前提する存在論的テーゼのリストは次のようになる。

- (1) 時間的部分のテーゼ。持続する事物は時間的部分をもつ。
- (2) 無制限構成のテーゼ。任意の時空領域は一つの融合体を構成する。
- (3) 瞬間的な持続物。持続する事物は瞬間的な段階である。
- (4) 対応者関係による持続。事物が持続するのは異なる時点に段階の対応者をもつことによつてである。

以上をもつて段階説の存在論的前提を明らかにするという本来の目的は達成されたとみてよいと思われる。とはいへ一見しただけでは(1)と(3)が整合的なかどうか訝しく思われるかもしれない。最後に付言しておこう。(1)時間的部分のテーゼと(3)瞬間的な持続物の条項は両立可能である。というのも瞬間的な段階とは瞬間的な時間的部分にほかならないからである。違うのは、(1)のテーゼは時間的部分の属する全体が当の時間的部分自身であるとは述べていない点

である。換言すれば、(1)における時間的部分は自分自身よりも多くの部分からなる時空的対象の真部分でありうる。だが(3)のテーゼが要請していることは、段階は時間的部分ではあっても、持続物としての時空ワームの時間的真部分にはなりえないということである。

註

- ¹ Sider(2001), p.60 による。
- ² このテーゼが採用される理論的な背景には、時間的部分を定義するのにサイダーが古典外延メテオロジーを採用しているという事情がある。
- ³ ここで指定される時点は複数ではなく単一であってもよい。
- ⁴ Sider(2001), pp.120-139 では時間的部分を認めることから無制限構成が導出されるという論証が行われている。この論証の妥当性については様々な異論があり、無制限構成を受け入れるかどうか意見は分かれる。註7も参照されたい。
- ⁵ 四次元主義は個体の理論に対して中立的である。たとえば個体を基体と属性からなる立場を採用しても、性質やトロップの束だとする立場であってもどちらとも整合的である。
- ⁶ cf. Lewis(1986), p.202.
- ⁷ 「自然な」時空ワームを取り出すべく、無制限構成に制約を課そうとする試みに Balashov(2007b)、Romerales(2008)がある。
- ⁸ ただしこのことはtより前の時点で緑色である鉱石が実はブルー色であることを保証するものではない。無制限構成のもとでは時点t以後も緑色であるような時空ワームもまた等しく構成できる。この原理だけではブルー色の時空ワームと緑色の時空ワームのどちらか一方を優勢とみなすことはできない。なお帰納法についてのこの有名なパラドクスについては Goodman(1983)を参照されたい。
- ⁹ 本文で述べている通り、ここでは Sider(1996)および(2001), sec.5.8 をもつぱら参照する。ただし段階説の詳細な検討と擁護は Hawley(2001), chap.2-3 においてもなされている。
- ¹⁰ cf. Sider(1996), p.437、Hawley(2001), p.44.
- ¹¹ Hawley(2001)では段階説を意味論的理論として扱いつつもその存在論的な内実をさまざまに考察している。その後 Haslanger(2003)において段階説は持続を説明する存在論的に独自の理論として紹介され、Varzi(2003)では段階説が意味論的な理論であるばかりでなく形而上学的前提があることが指摘されている。この路線をさらに押し進めたのが Balashov(2007a)であり、持続の存在論的な理論として段階説が定式化されている。
- ¹² Sider(1996)および(2001)による段階説のみを考慮するが、持続を説明するのに段階同士が担う関係に対応者関係とみなさないこともできる。Hawley(2001), chap.3 を参照のこと。
- ¹³ 不分離な部分はうさぎ全体であるとは限らないという点で段階とは異なる。
- ¹⁴ 言明に含まれる名辞の指示対象が発話の時点に存在していない場合は次のように解釈される。例として「ソクラテスは賢かった」という文を取り上げよう。サイダーはこの文をソクラテス段階に言及する事象 *de re* 時間的な主張ではなく言表 *de dicto* 時間的な主張だとみなす (Sider(1996), p.450)。つまりたとえば2008年に「ソクラテスは賢

- かった」が真であるのは、2008年において「ソクラテスは賢い」が事実だったときかつそのときにかぎる。
- ¹⁵ cf. Lewis (1968)。対応者理論の特徴は、標準的な様相論理が採用する様相演算子を用いることなく一階述語論理にいくつかの原始述語を付け加えることで様相概念を表現するところにある。
- ¹⁶ cf. Sider (2001), p.207。またルイスの様相対応者理論においても対応者関係は恒常的なものではなく文脈依存的なもののみなされている (cf. Lewis (1986), p.254)。
- ¹⁷ ただしここでは、「Aは存在しないだろう」がtにおいて真であることと、「Aは存在するだろう」がtにおいて偽であることは等値だとする。
- ¹⁸ この問題に対して段階説の提唱者でもあるサイダー自身は、瞬間的な段階が長期述語を例化するということを強調しつつも、長期述語に割り当てられる外延となる関連した段階の集合がどのように分析されるかについては自分の扱う問題ではないとしている (cf. Sider (2001), p.198)。
- ¹⁹ cf. Lewis (1968)、(1983)および(1986)。
- ²⁰ cf. Lewis (1968), pp.115–116。
- ²¹ 対応者関係に対称性が成立しないことは直ちに了解されないかもしれない。様相対応者関係については次のような場合が考えられる。世界w'に存在するシザーリオをwに存在する双子のヴァイオラとセバスチャンをかけ合わせたような人物だとしよう。このときシザーリオはw'にある他のどの存在者よりも双子のいずれにもよく似ているので、どちらにとっても対応者である。だがセバスチャンがヴァイオラよりもシザーリオに似ているとしたら、ヴァイオラはシザーリオの対応者ではない (cf. Lewis (1968), p.116)。
- ²² もし対応者関係が類似性から分析されることを許容するならば、対応者関係が任意の二つの段階の間で成立すると認めるのが自然だろう。あらゆるものはあらゆるものに何らかの点において類似しているといえる。
- ²³ cf. Lewis (1986), p.254。もっとも対応者関係は文脈依存的でなくともかまわないかもしれない。つまり文脈にかかわらずその外延が単一なものとしてとらえることも一応は可能である。
- ²⁴ cf. Lewis (1986), p.62。たとえばプラトンがアリストテレスより年長であるという関係は、関係項であるプラトンやアリストテレスの出生年のみから規定できるのであって、「話し手の関心」といった認識論的要素を持ち込む必要はない。

参考文献

- Balashov, Yuri (2007a) “Defining ‘Exdurance’”, *Philosophical Studies* 133:143–149
- (2007b) “About Stage Universalism”, *The Philosophical Quarterly* 57 (226): 21–39
- Goodman, Nelson (1983) *Fact, Fiction and Forecast*, Harvard University Press, 4th ed. [ネルソン・グッドマン『事実・虚構・予言』(雨宮民雄訳)、勁草書房、1987年]
- Haslanger, Sally (2003) “Persistence through Time”, in M. Loux and D. Zimmerman (eds), *The Oxford Handbook of Metaphysics*, Oxford University Press, 315–354
- Hawley, Katherine (2001) *How Things Persist*, Oxford: Clarendon Press
- Lewis, David (1986) *On the Plurality of Worlds*, Oxford: Blackwell
- (1983) “New Work for a Theory of Universals”, *Australasian Journal of Philosophy* 61:

- 343–377 [デイヴィッド・ルイス「普遍者の理論のための新しい仕事」『現代形而上学
論文集』(柏端達也、青山拓央、谷川卓編訳)、勁草書房、2006年]
- (1968) “Counterpart Theory and Quantified Modal Logic”, *The Journal of Philosophy*
65 (5): 113–126
- Romerales, Enrique (2008) “Persistence, Ontic Vagueness and Identity: Towards a Substantialist
Four-Dimensionalism”, *Metaphysica* 9 (1): 33–55
- Sider, Theodore (2001) *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Oxford:
Clarendon Press [セオドア・サイダー『四次元主義の哲学——持続と時間の存在論
——』(中山康雄監訳、小山虎、斎藤暢人、鈴木生郎訳)、春秋社、2007年]
- (1996) “All the World’s a Stage”, *Australasian Journal of Philosophy* 74 (3): 433–453
- Varzi, Achille C. (2003) “Naming the Stages”, *Dialectica* 57 (4): 387–412
- Williams, John Robert Gareth (2008) “Gavagai Again”, *Synthese* 162 (2): 235–259

(さいじょう れいな／北海道大学)

